

「改革派」李鴻章がみた 虚像としての日本

京都府立大学准教授
岡本隆司

おかもと たかし

一九六五年生まれ。京都大学大学院文学研究科博士課程満期退学。博士(文学)。宮崎教育大学助教授などを経て、現職。著書に『近代中国と海関』『馬建忠の近代中国』『中国「反日」の源流』など。

伝統を重んずる中国において、海外に眼を向ける「改革派」は常に少数派であり、異端者であった。近代において隣国日本と否応なく向きあわざるをえなかった「改革派」たちを規定したバイアスとは。

日中の関係にかぎらず、中国の対外関係を論じるには、まず前提におかねばならないことがある。それは一般に「中華思想」や「華夷体制」と呼ぶもので、あるいは適切な名称ではないかもしれない。ともあれ、そうした呼称に相当する中国の対外的な姿勢であり、それはつまり、周辺国に無関心だということである。

相互認識の非対称性

中国は古来、東アジアで突出して高度な文明を誇った。そうした位置にあれば、文明が劣る隣接の周辺国に対し、政治的な利害関係以上の関心をもたず、積極的にそれを知ったり、

そこから学ぼうとはしなかったのも、むしろ当然のなりゆきだったといえよう。そのあたり、周辺国に対する正史など、史書の扱い方をみれば一目瞭然である。もちろん客観的にみて、中国が現実に影響を受けていたかどうかは自ずから別問題だが、中国側の主観・態度としては、そうであった。

日本についても、同じである。日本の存在はもちろん知っていた。しかしたとえば、「魏志倭人伝」をみてもわかるように、中国が古来、日本を正確に深く知ることはなかったし、また知ろうとしなかった。そうした姿勢は「中華思想」などという言葉の連想から、当たり前のように考えがちだが、その影響は現在に至るまで、われわれが想像する以上に大きい。

一方、日本の位置はかなり特殊である。中国といわば即かず離れず、近いながらも遠い、とでも表現できようか。海が隔てているけれども、その割には距離が小さい。たとえば、同じく海を越えるにしても、東南アジア島嶼部ほど離れてはいないのであって、これは文物を積極的に摂取するには便利であった。

とはいえ地続きではないので、例えば朝鮮半島ほど近接してはおらず、一定の隔たりがある。そのために、直接的政治的な交渉をもつことが少なく、したがって軍事的な脅威を受けることも稀であり、その勢力・武力から身を守るにも便利だった。

そこから日本は、高度な文明をもつ中国に憧憬をもちながら、自分は自分という一種の自尊を維持することができた。「日出づる処の天子」という物言いは、その典型である。あるいは中国から直接にひどい目にあったことがなく、自尊をもてたがゆえに、一方的な憧憬をもち続けることができたともいえよう。否応なく中国と直接の交流・交渉をもたざるをえなかった周辺諸国は、必ずしもそうはいかない。どこも中国に対する態度・感情は、愛憎交えて複雑である。けれども日本は、その地理的な位置から、周辺国のなかでも最も特殊な事例に属するといっても、あながち間違いいではあ

るまい。

そんな憧憬と自尊をもつ日本は、そのゆえに、中国に対する関心は旺盛である。たとえばその中国研究は、昔から精緻であった。しかし逆のバクトルを考えてみればどうか。中国は周辺国に関心をもち、その姿を正確に知ろうという習性をもたなかった。日本に対しても、基本的な態度は変わらない。かくて日中の相互認識の非対称性という基本的な構造ができあがった。日中の関係を歴史的に考えるには、政治・経済・文化どの分野・レベルにおいても、以上のことが前提となる。

「改革」つは改むくむか

われわれはともすると、「改革」と聞けば、改良・改善と同義にとらえる。よいものだという感覚である。けれども一九世紀までの中国ではちがう。「改革」とは、とりもなおさず改悪である。改めることはよくないのである。史上高く評価される秦の商鞅の変法も、宋の王安石の新法も、世を乱した、とみるのが伝統的な通念であり、「改革」とは忌むべきものの、「改革派」とは少数派の、いわば異端とみなすべきものだった。

上でも述べたように、中国の大多數の知識人は、周辺国に関心をもたないのが通例である。日本もその例に漏れない。

だとすれば、善かれ悪しかれ、日本に関心をもつのは、日本と直接に関わりのある人々、もしくはごく少数の例外的な知識人ということになり、この両者は多く重なり合う。そしてその大部分が、いわゆる「改革派」にひとしい。極端な言い方をすれば、当初はごく少数の例外的な「改革派」しか、日本に注目しなかったわけである。

中国の対外関係の比重は古来、北方にあった。万里の長城が象徴するように、対外的な脅威はいつの時代も、北方遊牧民だったから、日本の存在などは、さして重視されなかった。それがクローズアップされてくるのは、ようやくモンゴル帝国の侵攻を撃退して以後のことであり、日本は軍事的にあらゆる国だという認識になってくる。日本の国力は以後も増大し、やがて攻勢に転じた。それが顕著になるのが一六世紀、いわゆる「倭寇」である。

軍事的脅威としての日本

「倭寇」の内実は周知のように、華人も含んだ種族・国籍にかかわらず武装貿易集団であるけれども、当時の中国側のイメージとしては、日本からおしよせる軍事的な脅威にほかならない。豊臣秀吉の朝鮮出兵も、その例外ではなかった。

したがって一七世紀以降、清代中国の日本イメージも、そ

の「倭寇」、すなわち軍事的脅威という先入観に支配されたものとなる。従前の日本に対する無関心があいまって、そのイメージは実情とかなりかけ離れたものになった、といつてよい。それでも一八世紀までは、日本はいわゆる鎖国であつて、日中双方ともたがいの交流を最小限にとどめたために、憧憬を抱くにせよ、脅威に感じるにせよ、それは頭のなかだけで話はすんでいた。

しかし一九世紀、近代になるとそうはいかない。西洋がその圧倒的な武力をもつて、日中の門戸をこじあけたのみならず、その体制を変えることを強制したからである。日本も中国も、西洋列強に国を開いたばかりではなく、互いに対しても開国することを余儀なくされた。

強いられた変革に対して、日本は前向きであつた。それが幕末の動乱から、明治維新と文明開化となつて、西洋化に邁進したのは、周知のとおりである。その足どりはむしろ軽く、まっすぐだったといえよう。

同じ時期に変革を強要された中国は、それとは対蹠的だった。まずいわゆる中華思想があつて、必ずしも西洋を自分より優れた文明だとはみなせなかつたし、さらに改革そのものに対する嫌悪があつて、制度・社会をつくり変えようとする動機をもちづらい。両者あいまって、中国の西洋化は遅々と

してすまず、紆余曲折を経ざるをえなかった。

そうはいっても、現実には局に当たる人々は、西洋の実力を目の当たりにし、肌で感じたから、相応の変革の必要を自覚せざるをえない。しかも一九世紀後半の事態は、中国史上未曾有のことであった。それまで中国に対する脅威は、北方の草原からしか来なかったのに、このたびは東南の海上から押し寄せたのである。否、厳密にいえば、未曾有ではない。先例があった。「倭寇」である。

ただし当時の脅威として感じられたのは、まず西洋列強であったから、日本の存在に注目するのは、少数の当局者のなかでも、いつそうごく少数であった。そのうちおそらく最も早く、日本に着眼した人物が李鴻章である。

その見方は当時の一典型をなすといつてよい。ひとつは従前の日本イメージである「倭寇」を踏襲していること、いまひとつは明治維新以前から日本の西洋化、とりわけ軍備の近代化に注目したことである。両者あいまって、日本を中国の軍事的脅威とみなした。

「改革派」李鴻章が引き継ぐ伝統的日本観

李鴻章という人物は、若くして科擧に合格し、首都のアカデミーたる翰林院に入ったエリートである。ところが一九世

紀の半ばに、清朝の打倒をめざす太平天国が興起して内乱になると、かれも郷里の安徽省にもどって、その防衛に従事した。やがて、長江筋で太平軍と死闘をくりひろげていた曾国藩につかえ、その部下となる。その李鴻章が浮上するのは一八六二年。この年、太平軍の攻撃を防ぐため、郷里で募集した義勇軍をひきいて、上海に進駐することになったからである。上海周辺は当時いままも、中国で最も経済的に豊かな地であり、ここをおさえた李鴻章は、中国最大の財力を手中にして、最大の軍隊をもち、そのために最大の権勢を誇りえた。

李鴻章は内乱の鎮圧にあたる一方、その必要から軍備の近代化に心をくだいていた。そのために、西洋の科学技術とその有用性にいち早く気づいて、その導入につとめたのであって、西洋化にはげむ日本に着眼したのも、そうした脈絡からである。のち日清戦争に敗れたため、今日では「売国」「誤国」と評されることも多いけれども、近代の中国では初めて日本に注目したかれは、やはり当時の少数の「改革派」にはかならない。

これは李鴻章がまだ上海周辺にいた一八六〇年代のことである。彼はやがて、首都の北京に近い天津に配置換えになり、清朝の軍事外交を主導する地位にのぼる。だが、その日本観

が軍事的な関心に偏り、しかも伝統的な「倭寇」通念にひきずられて、さしたる根拠もなく脅威とみなすものだったというのは、日中関係にとって不幸であった。そしてその見方が、「倭寇」に由来する昔ながらのイメージだけに終わらずに増幅していったのは、さらに不幸である。

日本と中国は一八七一年、日清修好条規を結んだ。清朝側では「改革派」李鴻章の主導によるものであり、その最大のねらいは日本の脅威を軽減することにある。実際上も友好親善の更新ではなく、対立相剋の始まりとなった。両者は以後、琉球の帰属をめぐる争い、日本が台湾に出兵するにょんで、かねて清朝側が恐れていた軍事的脅威が現実と化す。相互不信は決定的なものとなり、その日本観も固まってしまった。すなわち日本とは、同じく西洋化による自強をすすめるが、中国にいつ危害を加えるかもしれないライバルだということである。

この見方あるいは感覚が、以後の「改革派」を貫いている。少なくとも李鴻章からはじまって、蔣介石にいたるまでは、そういつて間違いあるまい。中国を変えなくてはならぬと考える「改革派」は、多かれ少なかれ、現状に危機感を抱いた人士である。だからこそ、近隣の日本、とりわけ強大化する日本の存在にも危険を感じて、これを脅威とみた。それと同

時に、その危機感ゆえに西洋化の達成という一点に関しては、日本に羨望の念も禁じえなかった。こちらも李鴻章から蔣介石まで一貫していよう。古来の無関心からすれば、大きく面目をあらためている。

李鴻章は日本を「中国永遠の大患」といいながら、とても日本の近代化には及びえないと歎息した。まだ「改革派」が少数派だったころである。中国が日清戦争に敗れて二〇世紀に入ると、ようやく「改革」を是とする考え方が多数をしめるようになった。それでも日本は、譲れない競争相手であり、相容れない敵対者であると同時に、学ぶべき師でもあった。二〇世紀のはじめ、日本に亡命していたジャーナリストの梁啓超は、中国の愛国主義を創造し鼓舞するかたわら、日本に負けるな、と知識人に呼びかけた。日本のような国家に変わって、日本を凌駕すること。それがなされるべき「改革」、あるいは革命の主要な内容となったのである。

希薄だった日本社会そのものへの関心

こうして「改革派」が主流となり、日本に対する関心は強まる。二〇世紀に入ってから以後は、両国の距離は近づいて、おびたしい人々が日本を訪れた。日本社会を実見した人は少なくなかったし、つぶさに日本を知る人も格段に増えたはず

である。もともと、それで中国人の思考法・日本観は、どれだけ変化したであろうか。

日本は脅威であり、ライバルである。ひとたび戦火を交え、利権で対立する関係になってしまった以上、それはやむをえない。けれどもそんな事態も、元来は清朝側の「改革派」による対日敵視が招いた部分もある。そうした事情を考え合わせると、日本を脅威とみなす見方は、「倭寇」から連綿と続いているともいえる。

それではいまひとつ、日本をモデルとみる考え方はどうか。こちらで特徴的なのは、日本に対するそうした注目が、西洋化の実績とともに強まってきた、という事実である。李鴻章が初めて日本に着眼したのも、その西洋化を評価してのことであった。その意味で、日本をモデルとする潮流が決定的になったのが、一九〇五年の日露戦争の勝利だったという史実は見逃せない。つまり西洋ではない日本が西洋化し、本場の西洋をしのぐほど強大になった結果が重要なのであって、その西洋化の内実、それを進捗させた日本人、日本社会、日本そのものの性質に対する注視・関心は、依然として希薄だった。日本のなかに日本を見ず、西洋を見ていた、と言い換えてもよい。

梁啓超の活動などは、その好例のようにも思える。かれは

「和文漢読法」を編み出して、おびただしい日本の著述を中国に紹介した。「和文漢読」とは「漢文訓読」のちょうど逆だが、しかし「漢文訓読」のように、中国文化を千年以上にわたって咀嚼したものではない。たんなるかなを除き、語順を変えるだけの浅薄な読解法である。しかもかれの紹介した著述は、西洋文明に関わるものがほとんどであって、要するに、日本を研究してはいなかった。二〇世紀中国の愛国主義と日本観は、そのようにしてつくられていったわけである。周辺国に関心をもたない中国古来の体質が、そこに作用している、とはいえないであろうか。

以上のように、脅威とみなすと同時に、モデルとする「改革派」の日本観は、一五〇年前、李鴻章の昔から始まっている。そして日本人からみれば、それがどうにもヒントがずれていて、脅威とする根拠が薄弱なもの、モデルとする対象が実は西洋なもの、現在と共通するところが少なくない。紆余曲折・試行錯誤を重ねてきた日中関係、あるいは中国の日本観も、一五〇年前の状態に回帰しつつあるのかもしれない。

根拠薄弱な脅威が現実と化し、学ぶべきモデルが相容れない敵対者になった不幸な歴史をくりかえさないために、現代のわれわれは何をすべきか。日中双方ともに問われている重大な問題であろう。■